

平成 23 年 2 月 28 日現在

研究種目：基盤研究 (C)
研究期間：2007～2009
課題番号：19530838
研究課題名 (和文) 美術文化のアイデンティティと美術教育のあり方に関する研究
研究課題名 (英文) Identity of Art Culture and the ideal method of Education through fine art
研究代表者 梅澤 啓一 (UMEZAWA KEIICHI) 立正大学・社会福祉学部・教授 研究者番号：80269993

研究成果の概要 (和文)：世界 80 数カ国の 6 歳前後から 15 歳までの子ども達の絵 5 万点余りを年齢に沿って分析していったところ、絵に表されている子どもたちがとらえる現実形態の様相とその形態に込められている感性の質は、基本的に共通であり、従って、表現と感性の発達過程とそのメカニズムには普遍性があると認められた。そして、このことをいくつかの典型作品を例にしてその発達過程とメカニズムを辿ることを通じて跡づけた。

研究成果の概要 (英文) : I analyzed 50,000-odd sheets of children's (6-15 years old) painting in 80-odd countries. I confirmed that appearances of realities and qualities of sensibilities grasped by children were understood by basically the same developmental process of sensibilities and the mechanism. I traced these facts through following developmental process of sensibilities and the mechanism in children's typical works.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：美術文化、アイデンティティ、美術教育、子どもの絵、世界の子ども、感性発達、発達メカニズム

1. 研究開始当初の背景

子どもたちの造形表現の歴史的変遷を見ると、その表現のあり方が、時代や国・地域

などの時間的空間的な美術文化を巡る状況や意識に、大きく影響されていることが感じ取られる。時間的空間的に制約された、指導

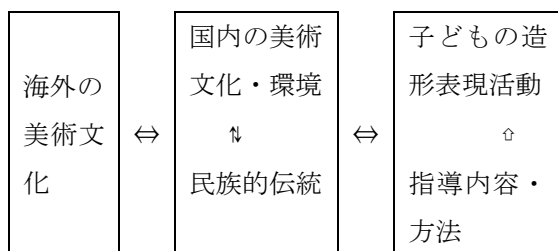
者と子どもたちとの関係が、指導内容・方法と表現のあり方に一定の「不自由さ」を招いてきていることは想像に難くない。

美術教育に携わる私たちとしては、このあたりの関係構造を意識的に明確にし、子どもたちの表現のあり方と指導内容・方法の関係について、深く追究してみることが必要である。この問題は、美術教育の根幹に関わる内容を含んでいるにもかかわらず、これまで正面から取り組まれてきていない状況にある。

2. 研究の目的

そこで、本研究課題を「美術文化のアイデンティティと美術教育のあり方に関する研究」として取り組むことにした。

具体的には、以下のようなイメージ図に基づく3課題の解明が求められる。



(1) 子どもたちの造形表現は、これまで、内外の美術文化からいかなる直接的間接的な影響を受けてきたか。美術文化環境と美術教育指導との両面のあり方からの影響を探る。

(2) 子どもたちの主体的な造形表現に独自性が求められるとすれば、それは、他国の模倣でもなく、ナショナリズムとも無縁な、日本の「美術文化のアイデンティティ」といかに関連し合っていくべきものであるのか。

(3) 一方で、広く世界の文化と美術のあり方に目を向けつつ、もう一方で、子どもたちの造形表現の独自性を保障する、美術教育のあり方とは何か。鑑賞を含むそのような美術教育の教育内容・方法とはいかなるものか。

すなわち、各国が「美術文化のアイデンティティ」を模索する過程で形成してきている、美術文化環境と美術教育指導・教育内容・方法を、いかに関連し合わせることによって、子どもたちが、自らのアイデンティティを主体的に形成しつつ、それを体現する独自の表現を実現していけるように保障し得るかという問題に取り組もうとした。

3. 研究の方法

この問題の解明のために、日本の農業共同組合(JA)の公益団体(社)光の家協会が、世界各国との交流・国際理解の促進の一環として毎年行い、2011年で18回目を数える「世界こども図画コンテスト」と協力して、作品分析から研究課題の解答の糸口を得ようとするところから取りかかった。さしあたり、第1回(1993年)～第14回(2006年)までの「世界こども図画コンテスト」入選作品(各300点、計4200点)、および2007年8月9日・10日開催の「日本美術教育学会学術研究大会・東京大会」で企画した「第13回世界のこども図画コンテスト」で展示した約180点(入選作品300点の内からの選択)の作品と、その審査過程でコンテストから除外された作品とを合わせた、世界約80数カ国の6歳から15歳の子どもの約5万点の作品の分析に取り組んだ。

しかし、第13回展における5万点を越える作品を長期間借り出すことはできないので、各国から100点ずつを選び(応募作品が100点に満たない国もある)、デジタルカメラで全作品を撮影した上で、作品分析を行うことにした。すなわち、各国ごとに年齢・男女・テーマと表現内容別に分類した後、テーマと表現内容に適った表現方法がいかに追究されているか、その達成度、疑問点・問題点、課題などについて抽出し、それぞれの特徴を

比較対照できるような表にまとめ、そのまとめから今後の研究を推し進めるに当たって必要な要件を割り出すという過程で進めようとした。

このため、具体的には、発達のメカニズムを明らかにする文献や各国の文化と教育のあり方や比較に関する文献の収集と整理、共同研究者の手助けを基に、子どもの作品をDVDとしてデータベース化し、作品を国別、年齢別に検索できるように進めた。

しかし、子どもたちの作品は、国ごと、年齢ごとに数量がまちまちであるために、量的研究方法では成果をあげることができないことが予想された。そこで、まずは、個々の作品ごとに分析を進め、発達における共通項は何か、さらに国や文化・状況による異なりは普遍的な発達のメカニズムに照らしていかにかに解釈しうるかの考察を行なうことにした。

すなわち、子ども達が、その人格発達の各過程で、対象のいかなる諸側面を本質ととらえ、それらを意識上で自らにとっての現実の形態（イメージ）としていかに構成し（事実判断）、同時にその形態にいかなる感性的評価を加えているかをつぶさに見ていくという仕方年齢ごとの子どもの作品の分析をし、そこに内在する発達のメカニズムを探っていった。そして、このことを通じて、これに関する筆者のこれまでの研究「感性と造形表現活動との発達連関とそのメカニズム」論（拙書『感性と造形表現↓その発達のメカニズム↓』晃洋書房 2003年）を再検討すると共に、この論の強化をはかった。

4. 研究成果

分析の対象となった絵を描いた小中学生にあたる6歳前後から15歳までの子どもが生活している国々は、アジア、オセアニア、

ヨーロッパ、アフリカ、アメリカの83カ国余りである（毎年全ての国が出品しているわけではない）。

これらの国々の子ども達の絵を年齢に沿って分析していったところ、絵に表されている子どもたちがとらえる現実形態の様相とその形態に込められている感性の質は、基本的に共通であり、従って、表現と感性の発達過程とそのメカニズムには普遍性があると認められた。

本研究におけるそもそもの問題意識は、各国内外の美術文化環境とそれに影響を受けた指導者たちの美術教育指導に、子どもたちの造形表現活動が直接的間接的な影響を受けてきているとの想定から、では、子どもたちの造形表現活動の独自性を保障する美術教育のあり方とは何かを問うことであった。従って、各国の文化や風土とそれに即した美術教育指導には大きな異なりがあり、子どもたちの表現の様相も根本的に大きく異なって現れているであろうとの予想があった。

確かに、人種や風土の異なりから生活のあり方（特に、人々の生活の営みや風景、祭や民族衣装など）、人物や動植物の形態、色彩などには、その国ならではの特徴が認められる。しかし、各国の風土的文化的様相が表現材料となることは当然のことであり、それらの表現材料を使用しての造形表現活動の異なりは、子どもたちの各発達過程における現実のとらえ方と感性を主題とした表現のあり方の根底にある普遍性から発する（各人の個性を介しての）現象的なバリエーションとみられるのである。

発達過程とそのメカニズムにこのような普遍性がみられる理由として考えられることは、絵を日本に送ってきた国々の中には戦争や貧困などの過酷な状況を抱えている国もあつたりするが（コンテスト出品作品を直

接日本に送ることができず、他国を通じて出品する国も、翌年には送ることができなくなる国もある)、80 数カ国の国々が総じて近代化・現代化の波に乗っての全世界共通の文化意識下にあり、またほぼ同様の教育階梯のもとで子どもたちが教育を受けていることである。このことは、第 13 回コンテストの審査過程で選外となった作品群から捨て難い作品 100 点を各国ごとに選んだ際に知り得たことであるが、5 万点を超える作品の中にはいわゆるアニメのキャラクターに似せたもの、日本でのコンテスト受けをねらったもの、絵画塾や学校での発達を無視した技術や指導の入り過ぎたものが多数散見された。そもそもコンテストに出品するような国や地域には、我々がこれまで対象としてきた発達の道筋が当てはまらないような、要するに近代文明の潮流の息のかかっていない国は含まれていないことが伺える。

人間発達過程とそのメカニズムの解明という営みは、いわゆる「近代化・現代化」と無関係な国々や地域の人々の場合においてもなされ、その上で人間である限り普遍的な発達の側面を洗い出すようにされることが肝要であることは言うまでもない。しかし、本研究で扱う資料においては、幸か不幸かそのような配慮は不要とみられる。ともあれ、本研究の対象となった子ども達の作品はその「近代化・現代化」の影響下にある国や地域のものであるが、考えてみれば、その時代や地域にとって必然的なものとして生れ出た表現の潮流に、子ども達もその指導者達も影響を受けざるを得ないのであるから（日本の場合、定型化された指導の視点や方法による子どもの作品が色濃く見られると感じられたが、おそらくこのことはいずれの国にも当てはまることであろう）、そのことを勘案した上で普遍的な発達過程とそのメカニ

ズムを探究することが肝心であろう。コンテストで選に入った作品も、同じく現代に生きる選者によって現在の思潮や潮流に基づいた一定の見方・とらえ方で選ばれている。しかし、そうした様々な要素が付加されていながらも（逆にそれら諸要素もそれぞれの表現の成り立ちやあり方を媒介する役割を担っている）、選ばれた作品の多くは当の子どもが自らの生き様や全人格の証しとして全生命力を賭して描いた力作であるので、その発達年齢の典型の一例として取り上げられ得ると考えられる。

感性は現実形態価値意識（現実形態に価値を認める意識）である。要するに、客観的に実在するもの(existence、人・もの・事象)の内から本質的な諸側面を抽出し、それらを再構成した像を、意識上に措定した現実(reality)形態として主体自らの活動の対象として客体化した上で、この現実形態を価値評価して得た「思い」（快不快・好悪・真偽・善悪・美醜などの価値意識）である。従って、現実形態は、認識と価値との両意識の機能的側面を統一させて担わされている、極めて人間的に関係づけられた媒介物ということになる。それゆえ、人間の発達年齢に即して多様に変形されてとらえられていく現実形態とそこに込められている感性という価値意識の内容の重層化や質の高次化を、造形表現活動などの人間の活動の足跡に沿って辿っていくことは本研究にとって不可欠なこととなる。

また、表現に至るこの過程は人間的な営みであるので、この過程を通じて人間は自らの肉体的ならびに精神的能力の担い手である人格（人間性[人間の本質]）の具体的現実存在の発達をも獲得している。従って、感性発達過程とそのメカニズムを明らかにする本研究は、人格の発達過程とメカニズムを辿

ることと表裏一体の研究となる。人格発達過程のメカニズムをヘーゲルの精神発達過程に倣って、「即自 an sich」、「対自 für sich」、「即かつ対自 an und für sich」の段階というとらえ方を基本にして打ち立てた、人格発達過程を内在させての「造形表現活動を媒介とした感性発達のメカニズム」（梅澤啓一、2000年）が、以下の表である。この表の基本的な考え方を理解しやすいように起承転結に例えれば、現階層：起「段階1 即自 これまでの自己」、承「段階2 対自 可能性

の追究」、転「次階層の準備期 困難性を意識しての転変」、結「段階3 即かつ対自 発達した自己に向けて」→次階層「段階1 発達した自己＝この階層の即自」、ということになる。

以上に述べてきたように、資料のどの国のどの作品においても基本的に発達年齢に即した共通な感性と表現のあり方がみられたが、このことをいくつかの典型作品を例にしてその発達過程とメカニズムを辿ることを通じて明示した。

階層-段階	発達年齢	感性と造形表現活動の発達の特徴	螺旋1	螺旋2	螺旋3
階層1	0歳から	生理的感性的感性と未分化な表現活動	即自①	即自①	
○段階1	6,7か月頃	対象(形態)意識の発生と感性の分化の芽生え(親しさ、愛着、不安など)			即自(1)
○段階2	10か月頃	周囲への働きかけと基本的な感性の表出(喜怒哀楽などの基本的感性)			対自(1)
●階層2 の準備期	1歳なかば頃	感性の多様化と造形的シエマの芽生え(自我の発生、達成感、気持ちの整え、泣く・喜ぶなどの多様性)		対自①	
○段階3	2歳前後	感性の保持とイメージや活動のシエマ形成へ(自我の拡大)			即かつ対自(1)
階層2	2歳なかば頃	感性(生活的価値意識)と造形表現活動の分化(発生)	対自①	即かつ対自① /即自②	
○段階1	2歳後半から3歳頃	感性的価値づけをした対象形態からのイメージの呼び起こしと意識的な造形表現活動(自我の充実、たのしい、うれしい、かわいい、きれい、かわいそう、こわいなどの個別的感性内容)			即自(2)
○段階2	4,5歳頃	主題による独自の造形表現活動とイメージの拡大(工夫した表現形態への思い入れと満足感)			対自(2)
●階層3 の準備期	5歳なかば頃	感性の保存と3次元の相対的な時間的空間的観念による場面構成の発生		対自②	
○段階3	6歳頃	時間の流れや空間の広がりをとらえた日常生活や活動から得た感性を主題にした意識的な造形表現活動の開始			即かつ対自(2)
階層3	7歳頃から	感性(生活的価値意識)と造形表現活動の独立(成立)	即かつ対自① /即自②	即かつ対自② /即自③	

○段階 1	7 歳頃	感性の保存と説明的・叙事的な造形表現活動の成立 (感性を主意とするテーマを意識的に表現)			即自(3)
○段階 2	8 歳頃	並列的感性と動勢ある造形表現活動(優しさ、面白さ、力強さ、こわさ、大変さ、困りといった感性の並列的ないし・羅列的な表現形態)			対自(3)
●階層 4 の準備期	9 歳頃から	表現形態への意識的な感性的評価と「実在感ある」造形表現活動		対自③	
○段階 3	10 歳頃	相補的感性と相補的造形表現活動(対象の形態の本質的ないくつかの側面とそれに覚えた感性を相補的に-糸を寄り合わせるように、ない混ぜにして-組み合わせさせた表現形態)			即かつ対自(3)
階層 4	11 歳頃から	美的感性と芸術的表現活動の分化(発生)	対自②	即かつ対自③ /即自④	
○段階 1	11, 12 歳頃	狭義の美的感性と芸術的表現活動の発生(対象の外側の形態だけでなく、内面の姿や性格を意味ある形態としてとらえ、それを美的にとらえ、芸術的に表現する工夫をする)			即自(4)
○段階 2	12, 13 歳頃	肯定的美的感性とこれを主意とする芸術的表現活動(美しさや生命力・人間性などへの感動を意識的に求め、造形手段としての美的な形と色を探求する、情緒ある造形的構成)			対自(4)
●階層 5 の準備期	14, 15 歳頃から	美的感性の相対化とこれを主意とする芸術的表現活動(肯定的な美的感性に對置する否定的な美的感性を主題として、表現内容や方法に工夫を加え、芸術性を意識しながらこの行為の意味を考え、ひいては人間としての生き方をも見直そうとする)		対自④	
○段階 3	16, 17 歳頃	美的感性の統一と表現形態・方法の探究(人間や事物のあり方を美醜表裏一体のものとしての存在としてとらえ、その真実の姿がなんであるかを探求し、その表現形態や方法を追い求める)			即かつ対自(4)
階層 5	18 歳頃から	美的感性と芸術的表現活動の独立(成立)	即かつ対自② /即自③	即かつ対自④ /即自⑤	

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 梅澤啓一、東京大会に向けて、子どもと美術、査読無、第 62 号、2008、8-14

- ② 梅澤啓一、世界の子どもの絵に見る感性発達過程とそのメカニズム、立正社会福祉研究(立正大学社会福祉学会学会誌)、査読有、第 12 卷 2 号、2011、23-32

[学会発表] (計1件)

- ① 梅澤啓一、美術教育のアイデンティティ↓美術文化の相違を超えて、日本美術教育学会全体共同討議基調提案、2007年8月9日、青山学院大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

梅澤啓一 (UMEZAWA KEIICHI)

立正大学、社会福祉学部、教授

研究者番号：80269993